平成３１年度　自己評価計画の中間評価に係る分析及び今後の方針

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定	分析及び今後の取組	判定基準
1 授業力の向上	「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点での授業参観や授業整理会等を行い、授業改善を図る。	教務課 全学部	【努力指標】 児童生徒の学習状況を把握し、授業の各単元の中で、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点を取り入れた授業を行う。	児童生徒の学習状況を把握し、授業の各単元の中で「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点の内、１つ以上を取り入れた教員の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	C 68%	小学部では１００％、中学部・高等部普通科では５７％、理療科では５０％の教員が、各単元の中で３つの観点を取り入れた授業を行った。中間評価が低かった中学部・高等部普通科、理療科においては、今後３つの観点を意識した授業計画を立てて授業実践し、評価していく。	中間評価がＣ以下の場合、内容や取組について検討する。
			【満足度指標】 保護者、理療科生徒が授業に満足している。 保護者アンケート	授業が工夫されており、わかりやすいと感じる保護者や理療科生徒の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	A 90%	小学部では１００％、中学部・高等部普通科では８３％の保護者が、理療科では９１％の生徒が、「授業が工夫されており、児童生徒にとってわかりやすい」と感じている。今後さらに教材の工夫や視覚的配慮、授業の進め方の検討を行い、児童生徒にとってよりわかりやすい授業を行っていく。	中間評価がＣ以下の場合、内容や取組について検討する。
2 キャリア教育の推進	交流のねらいを明確にし、実施後の成果や課題等を学部内・交流相手と共有していく。 ベルマーク回収活動を通して地域の方々と交流していく。	小学部 中学部 普通科 寄宿舎	【満足度指標】 交流相手と、交流のねらいや、成果、課題について共通理解を図って活動を行う。	ねらい・成果・課題の共通理解を図れたと感じる教員の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	A 86%	「ねらい・成果・課題の共通理解が図られている」との評価が８６％であった。学校間交流や地域との交流の成果を実感する声が多く聞かれるとともに課題も挙がっており、今後も交流相手と情報を共有し、検討・改善していく。	中間評価がＣ以下の場合、内容や取組について検討する。
			【満足度指標】 交流活動の目標や内容に満足している。 保護者アンケート	交流活動の内容に満足していると感じる保護者の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	A 90%	本校で取り組んでいる各交流活動について高い評価を受ける一方、他の盲学校との交流や居住地校交流以外の交流についての要望もあった。引き続き児童生徒のニーズに即した交流を検討・実施していく。	中間評価がＣ以下の場合、内容や取組について検討する。
	人前で話す機会を設定し、自分の気持ちや考えを伝えるスキルを伸ばしていく。	理療科	【成果指標】 人前で自分の気持ちや考えを伝えることができる。	日々のショートホームを通して人前で話すスキルが伸びた生徒の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	B 73%	前期にショートホームで話す機会を３回ずつ設けた。生徒全員が意欲的に取り組んだ結果、声が大きくなる、話にまとまりが出る等、多くの生徒のスキルの伸びが見られた。今後は一人一人の改善点を検討し、日々の学校生活で、更なるスキルアップを目指す。	中間評価がＣ以下の場合、内容や取組について検討する。
3 専門性の向上とセンター的機能の充実	各学部の実態にあわせたチェックシートを作成・実施し、研修を通して教員の専門性の向上を目指す。	小学部 中学部 普通科 寄宿舎 支援課	【成果指標】各学部の実態に応じた歩行に関するチェックシート及びロービジョン補助具のチェックシートを活用し専門性を高めていく。	歩行指導チェックシート、ロービジョン補助具の活用チェックシートを用いて、専門性が高まった教員の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	—	各チェックシートで、教員が年度当初の自己評価を記入し評価した結果、既に専門性の向上が見られる教員もいれば、まだ十分ではない教員もいることから、今後も研修会などをとおして学校全体の専門性の向上を図っていく。	長期間での評価であるため最終評価で評価する。
	各相談部署において年２回、相談内容の事例検討および報告会を開催し相談内容の理解を深めていく。	全学部 支援課	【満足度指標】 サテライト指導教室、就学前教育相談、通級指導教室などの幼児児童の実態、ニーズ、具体的支援について理解を深める。	報告会を年２回開催し、幼児児童の実態、 ニーズ、具体的支援について理解を深めた教員の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	A 100%	１回目の報告会後のアンケートではほぼ全員から「相談業務について理解を深めた」との回答であった。ただ個々の具体的な事例等について質問があったため、第２回の報告会では、教員から出た個々の質問を取り上げ、より理解を深めていく。	中間評価がＣ以下の場合、内容や取組について検討する。
4 業務の効率化	校務分掌や学校行事を計画的に遂行するために、各教員が改善策や具体的取り組みを行う。	全学部	【成果指標】 改善策や具体的取り組みを１つ以上取り入れ、実践する。	改善策や具体的取り組みを実践した結果、成果があったと感じた教員の割合が Ａ　８０％以上　Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上　Ｄ　６０％未満	A 83%	９７％が何らかの改善策や具体的取り組みを実践し、内８３％が「成果があったと感じている」と評価している。教材の共有データベース化や、前年度の反省を踏まえての業務遂行が功を奏している。一方「改善に取り組んだが、まだその効果は現れていない」等の意見もあることから、今後も各自の改善、取り組みを図っていく。	中間評価がＣ以下の場合、内容や取組について検討する。